

「神の子にされる」井上隆晶牧師
イザヤ書 43 章 1～7 節、ヨハネの手紙一 3 章 1～10 節

①【私たちは神の子である】

「御父がどれほどわたしたちを愛してくださるか、考えなさい。それは、わたしたちが神の子と呼ばれるほどで、事実また、そのとおりです。」（Ⅰヨハネ 3：1）
ここでヨハネは、私たちは神の子と呼ばれるほどに父なる神様から愛されたのだと言っています。自分は神の子であることについて考えてみましょう。

●「王子と物乞い」という童話があります。王子と物乞いが、たまたま顔がそっくりだったので、お互いの着ている服を取り換えて、王子と物乞いにすり替わることから物語が始まるのですが、これを私たちに当てはめて考えたら分かると思います。神の子であるキリストが私の汚れた着物を着て貧しくなり、罪人の中に数えられてゆき、反対に私がキリストという王子の服を着せられ、王子としての待遇を受けるようになってゆくのです。自分が王子になったのは、自分の力でもなく、努力によるのでもありません。一方的に王子にされたのです。それが洗礼式なのです。そのことをパウロは「**洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。**」（ガラテヤ 3：27）と言っています。

神の子にされると言っても、本当の意味で神の子になるわけではありません。本当の神の子というのはイエス様だけで、この世が創造される前から父なる神と共におられた子なる神であり、父から永遠に生まれたので「**神の独り子**」と呼ばれます。私たちはそのキリストに結ばれて、恵みによって神の子の身分にされたのです。あなたは神の子とされたと聞いても、ちっとも喜びも感謝も湧いて来ないのは、自分の罪で苦しんだことがないからです。何の苦勞もせずに親の財産を受け継いで、急に財産家になったりすると、実感が湧かず、与えられた財産も大切にしません。汗水たらして苦勞して、やっと今の地位を得た人が感謝することができるのです。だから罪人たち、犯罪者たち、この世の隅っこに追いやられた人たち、本当に人に迷惑をかけ、自分の罪に涙を流した人だけが、あなたは「神の子です」と言われた時、飛び上がって感謝をするのです。そういった意味で、自分の罪を知ること、罪に苦しむことがどうしても必要なのです。

②【私たちはキリストに似た者となる】

「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者になるということを知っています。なぜなら、そのとき、御子をありのままに見るからです。」（Ⅰヨハネ 3：1）私たちはすでに神の子なのですが、この世の人と何ら変わりなく、昔とちっとも変わらず、相変わらず罪を犯し、良い働きもないので、ど

う見ても神の子には見えません。しかしキリストが現れるとき、(再臨のこと) キリストに似た者に変えられるという事を知っています。これはパウロも繰り返し語っていることです。「私たちは…栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(Ⅱコリント 3:18)「キリストは、…私たちの卑しい体を、ご自分の栄光ある体と同じ形に変えて下さるのです。」(フィリピ 3:21)

信仰生活とは、信じたらそれで終わりなのではなく、ますますキリストに似た者になってゆくという成長がなければなりません。カリストス・ウェアは「救いはそれに与る人間にとって過去の一度だけの出来事ではなく、進行してゆく過程である」と言っています。プロテスタントは「信仰のみ」といいますが、信じるだけでは駄目です。実践と成長が必要です。そこで修道生活が必要になるのです。パウロの手紙の後半部分はすべて行いです。ヤコブ書は「行いが伴わないなら、信仰は死んだものです。」(ヤコブ 2:17) と語ります。

●葛飾北斎は江戸時代後期の浮世絵師です。彼は90年の生涯で3万点もの作品を残し、93回の引越し、30以上の画号を使い分けた自由奔放な生き様でも知られています。『富嶽百景』の巻末で初めてあとがきを載せ、これまでの半生とこれからの決意を語っています。要約すると「6歳の頃から絵を描き、50歳の頃から様々な作品を発表したが、70歳より前に描いた絵は取るに足らないものだった。73歳になって鳥や獣、虫や魚などの骨格や草木の生え方がわかってきた。80歳になればそうした摂理がもっとわかるようになり、90歳になってその奥義を見極めることができるようになるだろう。100歳になればそれを超越した世界を知ることができ、110歳では1点1画がまるで生きてるように描くことができるだろう。長寿の神様、自分の言葉が嘘でないことを見ていて欲しい。」

彼の絵に対する成長意欲はものすごいものがあります。今のクリスチャンには、キリストに似た者になるぞ！という意気込みがありません。

さて、面白いのは「なぜなら、そのとき、御子をありのままに見るからです。」という言葉です。グノーシスキリスト教にとっての復活とは、キリストを信じた時に、霊的(知識的)にこの世で既に起こるのであって、肉体の復活などないのです。もちろん肉体をもつての再臨もありません。ですから「御子をありのままに見る」というのは、キリストが栄光化した肉体をもつて再臨するのを見る時、「ああ、自分もあのような体になるのだ」と分かるのだということなのです。

③【キリストの再臨を待つ信仰があるか】

「御子にこの望みをかけている人は皆、御子が清いように、自分を清めます。」(Ⅰヨハネ 3:3) 自分の肉体がやがて栄光の体になることに望みをかける人は、放蕩生活を送るのではなく、節制をして準備をするということです。この世から未来を想像するのではなく、神の言葉が告げる未来から今を見なければなりません。これが「再臨信仰」です。今の人は未来への準備をしません。準備と言えば、この

世の物を蓄えることだと思っていますが、神の国に持っていけないようなものをいくら蓄えても意味がないのです。現代のクリスチャンは再臨を待つ信仰が弱いと思います。ある老人が、私の友人の外国人に「早く国に帰れ！」とひどい言葉を言いました。老人で、自分の人生の残り時間がもう僅かしかないのに、一生かけて腐った魂しか準備できなかったなんて、何て愚かかだと思います。他人ごとではありません。あなたはキリストの再臨に準備していますか？

④【神から生まれた者は罪を犯さない】

「御子の内にいつもいる人は皆、罪を犯しません。」(Iヨハネ 3:2)とか、「神から生まれた人は皆、罪を犯しません。神の種がこの人の内にいつもあるからです。この人は神から生まれたので、罪を犯すことができません。」(Iヨハネ 3:2)と、神の子は罪を犯さないと繰り返されています。この場合の罪とはイエス・キリストを否定することを指しています。人間でも親から生まれた者は、親の種、遺伝子を受け継ぎます。同じように神から生まれた者も、神の種を受け継いでいるのです。非常に実体的であり、身体的です。種を二つに割ると、真ん中に胚と呼ばれる部分があります。そこに将来の姿形を決め、そのように成長させるプログラムがつまっています。私たちの中には神の種が入っています。必ずキリストに似た者になるでしょう。

●四世紀のシソエスという師父の最後についての記事があります。

「死の床で師父シソエスの顔が太陽のように輝き始めました。彼は叫びました。『見よ、師父アントニイが来る。』さらに『見よ、使徒たちの群れが来る。』彼の顔はますます輝きを増してきました。すると彼は誰かに話しかけているような様子を示しました。弟子たちが彼の周りを囲んで、誰と話しているのか尋ねました。『天使たちがやってきて、私を連れてゆこうとしているので、もう少しだけ時間をくれるように頼んだのだよ。ちょっとでも悔い改めができるように。』と彼は答えました。弟子たちは驚いていました。『父よ、もはやあなたには悔い改めの必要などないはずです』彼は答えました。『本当のことを言うと、私自身、今の今まではたして悔い改めを始めたかどうかさえも疑わしいのだよ。』その瞬間、彼の顔から発する光は一層輝きを増し、弟子たちは畏れに満たされました。『見よ、主がやってくる。』師父シソエスはそう叫んで息を引き取りました。

師父シソエスは知らない内に自分の中にキリストの像が出来上がっていたのです。それが臨終の時に、外にいるキリストに呼ばれて、まるで鉄と磁石が引き合うように、外なる神と内なる神が共鳴して輝いたのです。「**神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼寝起きしている内に、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。**」(マルコ 4:26~27) 私たちの人生の終わりの時に、私たちの中におられるキリストが大きくなっていますように祈ります。ああ、楽しみです。